

見えない・見えにくい壮年層で構成するグループの 運営における課題と活性化に向けた取り組み

Challenges and Vitalizing Efforts in Managing Middle-aged Groups of Visually Impaired Individuals

木村 仁美

(世田谷区立総合福祉センター)

Hitomi KIMURA

(General Social Welfare Center in Setagaya)

要旨：

目的：見えない・見えにくい者の孤立感解消には、横のつながりが肝要である。しかし、30～50代（壮年層）が集う場は希少である。壮年層の当事者グループの活性化を促すための、専門職の関わり方や必要な支援に関する課題を整理する。

方法：専門職が発足に関わった3つの集まりを発足から詳察すると同時に、それぞれの集まりへの参加動機、長短所について参加当事者に電話調査した。

結果：いずれも情報収集を主目的に、交流の場を求めていることが明らかになった。情報発信を考えている人も多い。一方で、他者との差異による疎外感や、運営の負担感も顕在化した。

考察：壮年層は、障害の状況だけでなく、生活歴や生活様式も多様である。集団としてまとめようとせず、気軽に集う場を提供するだけでも、自然と場が活性化し、当事者自身の能動性も高まることが示唆された。また、当事者の主体性を尊重した円滑な運営のために、専門職の支援には適度な距離も求められる。

キーワード：地域、壮年層、交流、情報交換、活性化

Key Words: Community, Middle-aged, Socialization, Information Sharing, Vitalization

1. 目的

地域において視覚障害リハビリテーションの専門職（以下、専門職）が対応する見えない・見えにくい方¹⁾（以下、当事者）の多くは中途失明で、ほとんどが高齢である。個別対応を基本とするため、当事者同士が出会う機会には減多にない。専門職の訓練により彼らの日常生活技術は向上しても、晴眼者中心の社会における孤独

感・孤立感を払しょくするのは容易ではない。

視覚障害の領域でも同じ仲間との交流が心理的回復など多くの利点をもたらすことが確認されている（柏倉・新井, 2015）。そこで、筆者も当事者が集う団体や趣味サークルを積極的に紹介し、参加を促すようにしている。しかし、就労や家事などの社会的役割を担う壮年層の利用者は多くはない。壮年層を中心に活動する既存の集まりは地域になく、年齢に近い当事者と

の交流という彼らの求めに応えることは困難であった。

長らくその状況が続いたが、この数年、壮年層の利用者が微増した。趣味嗜好や生活環境などの共通点が複数名に見受けられたことから、地域でも壮年層の集まりが成立できると確信し、試みるに至った。

本論文の目的は、地域で生活する当事者の、特に壮年層に注目し、彼らの孤立感を軽減するための仲間づくりの場について、課題を整理することにある。発足した3つの集まりを、参加者への電話調査結果と照合しながら課題を抽出し、壮年層の居場所の確保と定着のための方策を示す。

2. 方法

2.1. A会

2.1.1. 仮説：性別、年代、家庭環境など共通点の多い均質な集団は、凝集性が高い。

2.1.2. 交流会の開催：仮説で述べた共通点を手がかりに10名程度の当事者を抽出し、電話にて交流会に誘った。声かけにあたり、他当事者との交流、情報交換という趣旨と参加者は立場の近い方々であることを説明した。人数がまとまったところで、希望者全員が参加可能な日時を調整した。会場は専門職が所属する施設の応接室など人数に見合う規模の部屋を確保した。会場には参加当事者と専門職のみが入室し、同行者は席を外した。進行は専門職が担当した。

後日、電話にて感想と今後の参加希望を確認し、次の交流会計画・開催を繰り返し、2016年10月～12月の間に毎月1回、計3回行った。

2.1.3. 運営の自立：継続参加と定期開催の希望を参加者に確認し、運営の段階的な自立を提案した。全員の同意を得て、会場確保に必要な団体登録等事務手続きを支援した。自主運営後、数回は専門職も同席したが、進行は世話役に任せた。徐々に専門職は介入を減らし、最終的には要請がない限り専門職の参加、介入は避けた。

2.2. B会

2.2.1. 仮説：関心を共有できる集団は、多様な構成員でも凝集性を保つ。

2.2.2. 交流会の開催：2017年12月、2018年2月の計2回実施した。手続きはA会と同じ。ただし、当事者が同行者の同席を望んだ場合、他者の了解を得て、了承した。同行者は本人の傍らで見守るだけで、当事者の懇談には基本的に加わらなかった。

2.2.3. 運営の自立：手続きはA会と同じ。

2.3. C会

2.3.1. 仮説：運営の負担なく、自由に集える場は、多様な人の居場所として交流が活性化される。

2.3.2. 開催方法：2018年7～12月、「情報交換会」の名目で毎月1回、計6回開催した。開催日時は平日13～16時（時間内は出入り自由とした）。毎回の開催告知を省き、定例日を設定した。会場は専門職が所属する施設内の会議室（定員20名規模）。障害者手帳、居住地域など参加条件は一切不問とした。また、支援者、ボランティア、家族、企業関係者など視覚障害に関心があれば誰でも自由に参加できることとした。よって、同行者の同席は当事者の判断に任せた。申込も不要とし、受付もしない。開催日に来場するだけで参加できることとした。

開催告知は6月に行った施設主催の展示会におけるチラシ設置とメールアドレスを把握している関係者36名に一斉送信したのみである。以降、機会があれば口頭での案内や、チラシ配布を行ってきた。あわせて、参加者にも情報拡散の協力を求めた。

2.3.3. 運営方法：施設は会場提供以外行わず、参加した専門職は会場の開閉鍵とその時間管理に伴う進行のみ行った。テーマを掲げず、内容も一切企画しない。参加者がその場で自由に話題提供できるようにした。

2.4. 電話調査

2.4.1. 対象者：A会、B会、C会いずれかの集まりに1回でも参加した経験のある当事者のべ41名（複数の集まりに参加した者もいる）。

2.4.2. 調査方法：調査期間は2018年12月4日～2019年1月15日。発足を支援してきた専門職が、電話法による半構造化面接を行った。回答は反復しながら記入し、回答者の意図に反しないよう配慮した。

調査項目は集まりへの参加動機、参加継続意思の有無とその理由、集まりへの意見・要望である。

2.4.3. 倫理的配慮：調査を依頼するにあたり、調査目的および結果公表の可能性について説明した。また、個人情報の保護、回答の自由や調査中断の自由を保障した上で、口頭にて調査協力の同意を得た。

3. 結果

電話調査の主要な項目と回答数を表1に示す。各会発足後の活動結果と調査結果は以下の通りである。

3.1. A会 (2016年12月発足)

3.1.1. メンバー：交流会で意気投合した40～50代の女性4名で発足。家族構成、失明原因など共通点が多い。点字学習の推進・指導を切望する参加者が世話役となった。ボランティアや新規メンバーの加入もあり現在7名に増えたが、一回参加したものの定着しなかった者が他に4名いた。

3.1.2. 活動内容：月1回開催。平日午後13～15時。世話役が指導する点字触読のグループ学習と情報交換を行っている。世話役以外は全員が点字に関して初心者もしくは学び直しである。メンバー間の連絡は主に携帯メールを使用。ランチ会やメイクセミナーなどを年に数回企画している。また、活動日以外にも連絡を取

り合うなど、仲の良さが伺える。

3.1.3. 電話調査：対象9名中、7名と連絡が取れた。全員が当事者同士の交流を目的に集まっていることが特徴的である。ちなみに、参加継続を希望しなかった2名は、いずれも疎外感を理由に述べた。また、連絡が取れなかった他の2名も他者との隔たりに理由に参加を継続しなかった。

3.2. B会 (2018年3月発足)

3.2.1. メンバー：スマートフォン（以下、スマホ）の画面読み上げ機能を使う7名。性別、年代、失明原因、スマホ歴など、その他の属性は様々である。年代は20～70代で、男性が多い（5名）。

3.2.2. 活動内容：発足時は、アクセシビリティ関係の情報交換を目的に、平日午後13～15時、月1回集まる計画だった。世話役はスマホに熟達した年長者が引き受け、SNSを中心に連絡を取り合った。しかし、1回の活動だけで、自然消滅した。

3.2.3. 電話調査：対象7名中、6名と連絡が取れた。情報を求め（66.7%）、仲間も欲しい（50.0%）が、交友関係拡大（16.7%）や交流（33.3%）を目的とした参加者は少ない。その反面、継続希望者は決して少なくない（66.7%）。会の消滅を知らなかった、消滅理由がわからないと述べる者もいた。

3.3. C会 (2018年7月発足)

3.3.1. メンバー：当事者以外も含む各回（計6回開催）の参加者数は13名、13名、22名、21名、21名、24名と推移し、のべ114名が参加した。年代は40～80代と幅があるが、壮年層が中心で、男女の割合は48名:66名とやや女性が多い。他地域からの参加は毎回1/4程度。企業の広報担当者や機器開発者、行政職員の参加もあった。

3.3.2. 活動内容：話題はデジタル機器関係が多いものの、福祉制度や日用品、生活上の困りごとなど多岐に渡る。

3時間の活動のうち、前半は全員が輪になり、参加者から提供された話題について自由に意見交換する。

そして、途中休憩を機に、後半の座席は自由

表1 電話調査結果抜粋

	(人)		
	A会	B会	C会
参加者数	9	7	25
回答者数 (回答率%)	7 (77.8)	6 (85.7)	19 (76.0)
参加理由 (カッコ内数値は回答者数に対する割合：%)			
友人・仲間作り	5 (71.4)	3 (50.0)	11 (57.9)
交友関係の拡大	6 (85.7)	1 (16.7)	11 (57.9)
同障害との交流	7 (100)	2 (33.3)	12 (63.2)
情報収集	5 (71.4)	4 (66.7)	15 (78.9)
申込不要	0 (0.0)	2 (33.3)	13 (68.4)
継続希望者数	5 (71.4)	4 (66.7)	16 (84.2)
継続理由 (カッコ内数値は継続希望者数に対する割合：%)			
共通の話題	4 (80.0)	4 (100)	13 (81.3)
楽しい	4 (80.0)	2 (50.0)	14 (87.5)
運営不要	0 (0.0)	3 (75.0)	10 (62.5)
気軽に参加できる	5 (100)	3 (75.0)	14 (87.5)

に変化する。会場は当事者でも自由に座席を移動できるため、小グループに分かれる、個別に情報交換の相手を探すなど、さらに活発な交流に発展していく。休憩直前に行う自己紹介を手がかりに後半の話し相手を見つける流れである。手探りで始めたが、数回の開催を経て、この形式に定着した。

3.3.3. 電話調査：対象25名中、19名回答。情報を得るために参加（78.9%）していることが明白である。参加継続希望の割合も高く（84.2%）、楽しい（87.5%）という理由が多い。

4. 考察

4.1. A会

集団の均質さが、高い凝集性を発揮し、仲良くグループに発展した。しかし、参加を見合わせた全員が疎外感を述べ、一部の在籍者からも疎外感の指摘がある。排他的な雰囲気ではないものの、わずかな差異が居心地を左右した。均質であるほど、疎外感が生じやすいと言える。皆で仲良く始めた点字学習も徐々に差が開き、少し足が遠のき始めた参加者もいる。当初の凝集力をどう維持するかが今後の課題である。

4.2. B会

スマホの操作技術という唯一の共通点（100.0%）も、スキルや知識に個人差があり、参加者間に格差が生じた。また、円滑な情報共有に有効と思われたSNSも、使いこなせなかった者が輪から外れ、その手軽さが過剰な発信を誘発した。それもメンバー間の温度差を増幅したと考える。モノを介した交流は男性特有のつながり方（岡本, 2018）とされ、その特性に合わせ、A会とは異なる対応が必要だったと言える。

4.3. C会

参加者は運営の心配をすることなく、より気軽に参加できるようになったと考える。また、テーマを設けず、無条件に参加できるため、今まで集団に馴染めなかった者にも参加の場を提供できたと言える。

参加者の感想は、とにかく「楽しい」の一言で、「他に類を見ない」と新規性や独自性、「こんな場を求めていた」と期待との合致度を評価する声が高い。同様の評価は同行者からも聞く。「他

より活気があり、面白い」そうだ。比較的若い集団であることや人数も関係するが、会の魅力や満足度の高さは独自の運営方法にもあると考える。

事前準備がないため、参加しないとその日の展開がわからない反面、それが妙味となり、面白みとして受け入れられた。即興的であることが、マンネリ化防止に功を奏したと考える。

また、多様な人物が集い、情報を求めれば必ず答えが返ってくる。この当意即妙さもリズムカルな展開をもたらしている。テンポの良さも活気の一因だろう。

さらに、共有したい情報も形を問わず、当事者が企画を持ち込むこともある。便利グッズの披露や情報提供者の紹介などである。調査でも、情報を発信したいという回答があった。また、多くの者が「いずれ発信したい」と述べている。このような能動的参加は、承認欲求を満たし、楽しみの度合いを向上させると考えられる。

冒険的な一連の試みは評価も高く、2.3.1 で述べた仮説も支持できる。しかし、数名は不満を抱き、参加を諦めている。車椅子使用者の物理的空間の狭さや、不愉快な参加者への不満など「居心地の悪さ」の訴えである。また、参加当事者のほとんどは障害等級1、2級で、それ以外の3名からは同調しにくさの吐露もあった。回を重ねるにつれ、古参と新参の間に隔たりが生じることも予想される。人数が増えると、こうした参加者同士の心物両面の交通整理が必要であると考えられる。それを誰が、どう担うかが今後の課題と認識している。

5. まとめ

互いに情報を求め、立場に近い者との交流を期待している点は、いずれも共通している。最近ネット上の交流も活発に行われているが、視覚情報の取得が困難な場合、音声化に対応するテキスト情報だけでは十分とは言えない。やはり直接会って得られる情報が勝る。当事者にとって、集うことは情報収集の手段であると言える。

壮年層の場合、“予定の合うメンバーが都合のいい時間に集まって、程なく解散する”（田中,

2015) つきあい方が丁度よいとされ、今回の調査からも「気軽に参加できる」(A会：100.0%、B会：75.0%、C会：87.5%) ことが参加理由として重視されている。会場までの移動が「気軽」である点でも、地域で開催する意味は大きいと言えるだろう。

しかし、当事者だけで場を維持することは「気楽」とは相いれない。“運営側の当事者は、援助者として、仲間としての両方の立場で参加するため、役割葛藤が生じる場合もある”(橋本, 2013) と指摘される世話役の負担は無視できない。参加継続理由の選択肢「運営の手間がない」に対し、A会で選択した者はなく、B会は75.0%が選択した。B会では「気楽」な参加者の中で、世話役だけが対極で心労を背負っていたと考えられる。

一方、C会に見るように自ら運営の一端を担う者もいる。“職員の支援を控えた方が自立した運営を促進”(伊藤ら, 2012) し、「専門職が仕切らないのがいい」というC会の評価もそれを物語る。

“メンバーが出来るだけ自由に居心地よく過ごせるよう、縁の下の力持ちの役割を果たす人物”(松本, 2010) が円滑な運営には不可欠である。それを当事者が担うことが理想だが、一朝一夕にはいかない。B会の参加者からは「第三者が入っていると良かった」という意見も出た。お互いの表情を読み取ることが難しいという観点からも、専門職が適度な距離を保ちながら、長期的に支援していく必要があると考える。

謝辞

当事者の皆さんには、電話調査に快くご協力いただき、有意義なご意見を頂戴いたしました。また、筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センターの飯塚潤一教授には、執筆にあたり、貴重な助言を賜りました。記して深謝いたします。

註

- 1) 本論文では、法令等における「視覚障害」の定義に該当しない場合も含め、「見えない・見えにくい」状況にある方々を対象とし、表題などにも用いている。

文献

- 1) 橋本達志 (2013) 当事者による支援活動 (ピアサポート) の現状と課題 PSW との協働を考える. 精神保健福祉, 44(1), 4-7.
- 2) 伊藤良輔・武田貴子・中村龍次・柴垣明 (2012) 北九州市における中途視覚障害者の自助グループ立ち上げまでの変遷と展望—中途視覚障害者へのエンパワメントアプローチの実践—. 視覚障害リハビリテーション研究, 2(1), 25-29.
- 3) 柏倉秀克・新井美千代 (2015) 在宅視覚障害者に対するピア・サポート活動の効果 参加者へのグループインタビューから. 保健の科学, 57(3), 209-213.
- 4) 松本真由美 (2010) 精神保健領域のセルフヘルプグループ～当事者のみで運営を行う組織の特性～. 精神保健福祉, 41(3), 183.
- 5) 岡本純子 (2018) 世界一孤独な日本のオジサン. KADOKAWA.
- 6) 田中俊之 (2015) <40 男> はなぜ嫌われるか. イースト・プレス.